

HTLV-1 関連脊髄症について

私の勤める神経内科では神経・筋肉の病気が中心ですが、感染症からくる病気も診察しています。今日はそのなかで、九州・沖縄に多い疾患である HTLV-1 関連脊髄症についてお話をしたいと思います。ウイルス感染が原因で、歩行障害や排尿障害をきたす病気です。

少し長い病名ですので、HTLV-1 associated myelopathy の英語名の頭文字をとって HAM(ハム)と言いますので、以後は HAM と言わせてもらいます。患者さんも、こちらの方が覚えやすいので皆さん HAM と言われています。

① 発症の原因

HTLV-1 というウイルスに感染することが原因です。ヒトの免疫細胞である T 細胞に感染し、感染後は体内から消えることはありません。ウイルスに感染していることで、炎症反応が引き起こされ、それが慢性的に続くことで障害が出てきます。HAM の場合は感染細胞が脊髄内に入り込むことで、脊髄内での慢性炎症が引き起こされ脊髄の障害がおこり、下肢や排尿の症状が出ると考えられています。

この HTLV-1 感染者は、沖縄・九州に多く、母乳を介した母子感染が主な感染経路ですが、夫婦感染、輸血による感染も認められています。主な感染経路である母子感染について、現在では妊婦健診で HTLV-1 のチェックが行われておりますので、ウイルス感染が認められた際には授乳については主治医との相談が必要となります。輸血による感染については、昭和 61 年からは輸血の際に HTLV-1 のチェックを行っておりますので現在では感染の可能性はありません。

② 患者数

HAM の患者さんは約 3000 人とされています。

HTLV-1 に感染している人がすべて HAM を発症するとは限らず、感染者の 400 人に 1 人くらいとされています。発症する人しない人がいるのが何故なのかはわかっていません。

③ 症状

30・40 歳頃から歩行障害、排尿障害で発症します。歩行障害としては、痙性歩行といって、足の突っ張りが特徴です。ツッパリのためモモが上げにくく、膝が曲げにくくなります。そのため歩きにくい、足がもつれる、駆け足が遅いなどの症状がでます。歩幅が狭くなり、内またで歩くようになります。非常にゆっくり進むので気にしていない方もいますが、周囲から歩き方がおかしいと指摘される人も多く、それで病院受診される方も少なくありません。足の症状と前後して、おしっこのトラブルを抱える方が殆どです。

頻尿となったり、夜間のトイレが多かったりします。おしっこが出しにくくなり、膀胱炎を繰り返す人もいます。腰痛、下肢の痺れ、下肢の感覚が鈍くなったりします。

進行すると下肢のツッパリ、筋力低下のため、起立や歩行に杖が必要になり、更に進むと車いすが必要となる人もいます。おしっこについては、内服薬での調整もしますが、自分で排尿できずおしっこの管を入れる人もいます。

基本的にはゆっくり進行しますが、ときどき急速に症状が悪化する人がいますので、その際は早めに検査や治療が必要になります。

④ 診断

病歴の確認と神経学的な診察を行い、血液・髄液検査、MRI の検査などを行います。沖縄病院神経内科では入院にて、検査・診断を行っています。

⑤ 治療

残念ながら HAM を完全に治す治療法はありません。原因のウイルスが感染し、存在しているのが、重要な免疫細胞の中なので、ウイルスを完全に死滅させる治療ができないからです。しかし、ウイルスの増殖を抑える薬の開発や応用は始まっており、今後の研究が期待されています。

とはいえ、現在でも患者さんは困っているので、症状の緩和や進行を遅らせることを期待して、当科でも内服治療やステロイドの点滴を含めた数種類の点滴治療を行っています。リハビリも積極的に進めており、ストレッチ、腰回りや下肢筋力の増強、歩行訓練の継続は、内服や点滴治療にも匹敵する効果があります。継続的にリハビリを行うことは HAM の患者さんには非常に重要です。

⑥ 福祉サービス

HAM は根治治療が難しく、ゆっくりと進行していくので、年単位で症状に合わせての治療やリハビリを継続する必要があります。長期間治療を継続するためには、福祉サービスは有効活用する必要があります。

HAM は平成 27 年 1 月から国が指定する難病医療費助成制度に認められましたので、診断基準・重症度を満たせば申請することが出来ます。障害度に応じて障害者手帳や障害年金の申請の検討、65 才以上であれば介護保険、そのほかの市町村が提供するサービスの利用ができます。これらの利用については、HAM の診断・重症度の判断が必要になりますので、主治医との相談してください。

⑦ 最後に

HAM は、感染、発症、進行の期間が長く、「なんでこんな病気になったのだろう」と悩まれる患者さんも少なくありません。HTLV-1 ウイルスは人類進化の歴史とともに受け

継がれてきたウイルスであり、感染自体は本人の責任ではありません。遺伝するものでもありません。

現在 HTLV-1 ウイルスの認知度は多少上がっていますが、まだまだ一般的に知られているウイルスではありません。発症した時点で配偶者や子供がいる方が殆どですので、本人・家族・周囲の正しい知識の獲得が必要となります。病院や保健所、公的なホームページでも HTLV-1 に関する情報は入手できるので、心配なことがあれば医療機関や保健所などで相談してください。